

第 27 回腫瘍病理学セミナー・北信がんプロ FD 講演会

「病理組織検体のオミックス解析に基づくがんの個別化医療開発とその実装」

講師 金井弥栄先生（慶應義塾大学医学部病理学教室 教授）

日時 平成 29 年 11 月 21 日（金）16：00－17：30

場所 金沢医科大学基礎研究棟 3 階 大学院セミナー室

担当 病理学 I 清川悦子教授



「講師紹介」

1989 年慶應義塾大学医学部卒業、93 年同大大学院医学研究科博士課程（：病理学専攻）修了。93 年国立がんセンター研究所病理部研究員、2002 年 国立がんセンター研究所病理部長、10 年 国立がん研究センター研究所分子病理分野長（改組による）、10-14 年 国立がん研究センター研究所副所長、15 年より現職。

演者は長年がん症例の病理診断に従事し、病理組織検体からバイオバンクを構築してきた経験から、日本病理学会のゲノム病理組織取扱い規約委員会委員長を務め「ゲノム研究用病理組織検体取扱い規程」を取りまとめた。本講演では、病理検体の固定時間・方法など、すぐに役立つ情報をデータを基に紹介した。次に、実際にヒト検体を用いた様々な癌腫のゲノム解析の研究結果を紹介した。一見正常に見える正常部位と腫瘍部位でのゲノム解析を行うと、ドライバー遺伝子変異に先行する DNA メチル化異常があり、診断に有用な遺伝子を複数組み合わせることで感度や特異性の高いスクリーニングが出来る可能性を示した。このような研究結果を実臨床に役立てるために、病院で使用可能な高速液体クロマトグラフ開発についても紹介した。最後に International Human Epigenome Consortium (IHEC) の日本代表として参加し、正常人での個体差を調べるなどの活動を紹介した。膨大なデータを予断なく解析した確かなデータは、聴衆に多くの刺激を与えた。

本講演会は、連携機関にテレビ会議システムを用いて配信された。セミナー後には、試料調整方法の詳細や、将来の病理医の役割、エピゲノム変化の遺伝の有無など、複数の施設からの質問にも演者が応じることが出来、実りある講演となった。

また、昨年度の引き続き、金沢大学がん進展制御研究所および Hokuriku Woman Researchers' Network との共催で、上記セミナーに先立ち、がん研の越前佳奈恵助教による「炎症依存的な胃発がんモデルマウスを用いた研究」、金大・学際科学実験センター大黒多希子教授による「子宮で発症する癌と Pten の関係～マウスモデルを用いた解析～」の 2 演題を発表する機会を設けた。マウスモデルを用いた癌研究の最新の知見で、こちらも活発な議論が行われた。

（金沢医科大学病理学 I 清川悦子 記）